

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00305

研究課題名（和文）中世歌論史の再構築—定家歌論の受容と変容—

研究課題名（英文）Reorganization of the Critical History of Medieval Japanese Poetry: Reception and Transformation of Fujiwara Teika's Poetics.

研究代表者

渡邊 裕美子 (Watanabe, Yumiko)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：30713078

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、藤原定家著と考えられてきた『毎月抄』の成立時期を見極め、偽書として定位し、定家歌論の受容と変容の史的展開を明らかにすることを目的とした。2019年度は、『毎月抄』の伝本調査を順調に進めることができたが、その後はコロナ禍により、大きな制約を受けた。しかし、2020年度には、伝本調査の成果の一部を公刊し、2021年度には国際会議で「偽書」をテーマとして口頭発表を行った。2022年度には、その内容に関わる論考を2本成稿した（公刊はいずれも2023年度）。また、2022年度には、『毎月抄』の周辺に広がる問題の研究をとおして、偽書の成立と展開についての考察を深めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、藤原定家の歌論書として享受されてきた『毎月抄』を主たる研究対象とした。『毎月抄』は近代以降、偽書か否かの論争があったが、本研究では偽書として明確に位置づけた。まず、伝本調査の結果などから、成立年代が14世紀初頭であることを明らかにし、書簡体というスタイルと「読者」に着目して、俊成や定家の他の歌論書と比較検討を行ない、中世近世を通して広く享受され続けたか理由を探った。定家の後代への影響は和歌史にとどまらず、文化史にも及ぶ。本研究をとおして定家仮託偽書の生成と享受の問題の一端を明らかにしたことで、日本文化の基層の理解の深化に寄与することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to determine the date of establishment of the Maigetsusho which has been considered to be written by Fujiwara no Teika, to localise it as a pseudograph, and to clarify the historical development of the reception and transformation of Teika's poetry theory. In FY 2019, I was able to make good progress in the investigation of the biographies of the Maigetsusho, but were then severely limited due to the Corona disaster. However, in FY2020, I published some of the results of the biographical survey, and in FY2021 I gave an oral presentation at an international conference; in FY2022, we completed two papers on its contents (both published in FY2023). In FY2022, I also deepened my examination of the formation and development of the forgery through research into the issues surrounding the Maigetsusho.

研究分野：日本古典文学

キーワード：藤原定家 歌論書 偽書 毎月抄 書簡体

1. 研究開始当初の背景

中世に入って急速に深化した和歌の創作理論の始原に位置するのが、藤原定家の歌論書である。そのうち『毎月抄』は、以前から定家仮託書であることが疑われており、筆者も申請以前に『毎月抄』が偽書であるという論考を発表していた。しかし、当時はまだ定家真作説が優勢であった。『毎月抄』は定家歌論として、中世・近世を通して享受され続けており、その広範な流布と影響を考えると、成立時期を明らかにして、偽書としての性格を明らかにすることが必要と思われた。その検討を通して、定家歌論がどのように変容され享受されていくのかが明確になり、中世歌論史を再構築することができると思った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の二点にまとめられる。

- (1) 『毎月抄』の成立時期を見極め、偽書として定位すること
- (2) 定家歌論の受容と変容の史的展開を明らかにすること

3. 研究の方法

本研究では、以下のような方法で研究を進めることを予定していた。

- (1) 『毎月抄』他の伝本について調査をして、そこから成立時期や流布の様相を見極める。
- (2) 『毎月抄』を、俊成や他の定家の歌論書との比較検討を通して独自性を抽出する。
- (3) 『毎月抄』の書簡体というスタイルに着目して、日本中世の歌論書にとどまらない視野から検討する。
- (4) 『毎月抄』の影響下に成立したとされる鶺鴒系偽書や、『毎月抄』に影響を与えたと考えられる『八雲御抄』や『詠歌一体』との関係を、『毎月抄』を偽書として定位した上で、改めて検討する。

4. 研究成果

(1) 計画していた『毎月抄』他の伝本調査については、コロナ禍の影響で、大きな制約が生じた。しかし、そのような中でも、これまで未紹介の伝本を含めて8本対校の校本を公刊できたことは大きな成果であったと考える。『毎月抄』の伝本調査は、45年前に高梨素子氏によって制作された「校本」発表以降、ほとんどなされていない状況で、新たな校本をもとに、『毎月抄』の成立時期や流布の状況を明確にすることが可能になった。成立時期については、14世紀初頭という見通しを得て、その論考を2023年度中に発表予定だが、その他、成立状況の詳細や流布の様相など、今後、なるべく早い時期にこの検討結果を発表したい。

(2) 『毎月抄』の内容的な検討では、書簡体というスタイルに注目して、2021年にヨーロッパ日本研究協会の国際会議で口頭発表を行なうことができた。この国際会議は、コロナ禍で1年延期の上、オンライン開催となり、その点は残念であったが、この準備をとおして、『毎月抄』の成立と、その後の流布を考える上で、「読者」の重要性に気がついた。その成果は、2022年度に2本の論考にまとめることができた。そのうち1本は、この研究計画の総まとめ的な内容で、2023年度中に公刊予定である(『毎月抄』の「読者考」『古典文学研究の方法と対象』花鳥社)。もう1本は、EJJSの口頭発表をきっかけに、postmedieval誌から投稿依頼を受けて成稿したもので、こちらも採用されれば2023年度中に公刊となる(論題: Those who listen to Teika's 'voice': the author and the reader of poetry treatise forgeries in medieval Japan)。

(3) 上記のうち『毎月抄』の「読者考」では、「読者」という視点から、俊成の『古来風体抄』や、定家の『近代秀歌』『詠歌大概』と比較検討し、『毎月抄』が初心者向けで、具体的実践的内容を多く含むという特質を持つことを明らかにすることができた。

(4) また、上記2本の論考をまとめる過程で、書簡体歌論書の先行例として『越部禅尼消息』と『夜の鶴』があることに気がついたが、これらと『毎月抄』の関係の解明は今後の課題とした。

(5) 以上の他、当初の研究計画にはなかったが、中世歌論史を捉えるために重要な視点を得ることができた研究成果が以下2点ある。

『百人一首』は、これまで藤原定家撰と考えられてきた。しかし、田淵句美子氏の研究によって、定家撰『百人秀歌』から後人が改訂したものが明らかになった。この新たな研究をより一層深めるため、中川博夫氏、田淵句美子氏と共編著者となって、『百人一首の現在』を刊行し、個人的には『百人一首』と歌仙絵」という論考を寄稿した。この『百人一首』と歌仙絵が定家によるものとの言説の流布は、『毎月抄』成立の時期と重なっており、偽書の成立と流布について考察を深めることができた。

「歌枕」は歌ことばの中でも重要なものであるが、この集成書は中世近世をとおして多く作成されている。歌枕は、『毎月抄』をはじめ、その影響下にある歌論書では、取り立てて論じられ

ることではない。しかし、早くは、『俊頼髓脳』、その後、『正徹物語』には言及がある。歌論書の周辺に、歌枕を中心とした歌語集成書があることを視野に入れておくことは、中世歌論史を見通す上で重要であると思われる。2022年度には「歌枕」に関する論考を発表したり、講演を行ったりして考えを深めることができ、また、UBC,UCLAにおいて大学院生と「歌枕」について討議をする機会を得た。こうしたことは、今後、研究を展開する上での基盤を形成することにつながったと思う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡邊裕美子	4. 巻 20
2. 論文標題 彷徨する寂蓮－寿永百首家集『寂蓮集』雑歌をめぐって－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本文学研究ジャーナル』20号「私家集－和歌と自己語り」	6. 最初と最後の頁 55pp.-70pp.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡邊裕美子	4. 巻 144
2. 論文標題 『毎月抄』校本 八本対校	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『立正大学文学部論叢』	6. 最初と最後の頁 49 - 73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡邊裕美子	4. 巻 なし
2. 論文標題 『千載和歌集』の成立過程 「うちぎき」から勅撰集へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『和歌史の中世から近世へ』	6. 最初と最後の頁 119-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊裕美子	4. 巻 なし
2. 論文標題 描かれた歌枕－歌と絵を同時に鑑賞すること	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歌枕 あなたの知らない心の風景	6. 最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 渡邊裕美子
2. 発表標題 “Birth of a forged Waka Theory Book; 'Maigetsusho' by FUJIWARA no Teika ”
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊裕美子
2. 発表標題 歌枕の魅力ー時空を超える”旅”
3. 学会等名 サントリー美術館（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中川 博夫、田淵句美子、渡邊 裕美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 470
3. 書名 百人一首の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>(1) 2021年のEAJSのパネルテーマは以下のとおり。 Frauds, Forgeries, and Newfound Works https://www.nomadit.co.uk/eajs/eajs2020/conference-explorer#9217</p> <p>(2) 2022年度中に成稿したが、刊行が2023年度予定の成果論文は以下の2件。 「『毎月抄』の読者考」（『古典文学研究の対象と方法』花鳥舎） Those who listen to Teika's 'voice': the author and the reader of poetry treatise forgeries in medieval Japan (journal postmedieval, where Hannah and I are guest-editing a special issue on the topic of Medieval Forgeries / Forging the Medieval)</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 地名から歌枕へ - 吉野を中心として -	開催年 2023年 ~ 2023年
--------------------------------	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------